

マーストリヒト大学 2016年度交換留学成果報告書

Maastricht University, Faculty of Arts and Social Science, European Studies (MA)

一橋大学国際公共政策大学院 グローバル・ガバナンスプログラム

1. 目的

2017年8月20日～2017年2月11日までオランダ、マーストリヒト大学のEuropean Studiesのプログラムに留学をした。留学するにあたり、3点の目標を設定した。第1に、今まで日韓交流やタイでの駐在生活、日中韓協力事務局でのインターンなどアジアに軸足を置いて国際関係について考えてきたことから、新たに「ヨーロッパ」の視点を培いたいという狙いがある。第2に学部時代に国際法を専攻しており、ICJやPCA等の国際裁判所が集まるハーグを有する「オランダ」で学ぶことで、国際法実務の現場を知りたいという点だ。そして、第3にEU設立の条約で知られる「マーストリヒト」において、研究課題でもある地域主義についての知見を深めたいということが挙げられる。実際にマーストリヒト大学は今年で40周年とヨーロッパの中でも若い大学でありながら、PBL (Problem Based Learning) といった生徒同士のディスカッションを重視した授業形式や、各種の専門家を招いた講演会などを積極的に開催する等と充実した学習環境を提供しているほか、教授、生徒の大多数がヨーロッパのみならず世界各国から学びに来ており、国際色豊かな雰囲気がとても魅力的だと感じた

2. 大学授業内容

私が所属したEuropean Studiesのプログラムは1年間で修士号を取得することを目指し、卒業後にはEU等のヨーロッパの政策に関わる実務家を養成することを目的としている。そのため、オランダ、ベルギー、ドイツ、フランス等ヨーロッパ各国から職務経験を有する人やpre-masterで1年間European Studiesを学んできた人等多様な同級生約50名に囲まれて、半年間共に学ぶことができた

European Studiesのプログラムは3つの専門分野に分かれ、分野ごとに履修すべき科目が事前に設定されている。今回選択した” Europe in a Globalising World” は他のEUの内政及び外政といったEUの政策を中心とする分野とは異なり、グローバル・ガバナンスにおけるEUをテーマとしより俯瞰した視点でEUと国際情勢の関係性について国際関係理論を用いて分析・理解するプログラムとなっている。

また、マーストリヒト大学の授業システムの特徴として、留学期間である9月から2月は3つのsemesterで区切られ、一つのsemesterにおいて一つの授業プログラムを集中して学ぶ形式をとっている。また、それぞれの授業プログラムは主として、(1)大人数講義形式のlecture (2)履修生徒を少人数に分割しlectureについてのディスカッションを行うゼミ形式のtutorial (3)work shopやskill trainingといったグループワークの3つの形式で構成されており、より多彩な背景を有する学生同士で意見を交換することを重視したプログラムであった。

私は3つの授業を履修し、period1はヨーロッパの世界大戦後の歴史と統合について学んだPost-war Europe period2は国際関係理論及び実務の視点からケーススタディーを取り入れ

たInternational Relation and Global Governance、そして、period3は地域主義をEU統合の歴史だけでなく世界各地の地域を俯瞰的に取り上げ分析するComparative Regionalismを学んだ

period1はヨーロッパの歴史であったため、はじめはあまりなじみがなく、英語での授業もテストも慣れていなかった点が大変だったが、大学院レベルの授業を優秀なクラスメイトと共に受講できたのはとても刺激になった。特に興味深かったのはヨーロッパ統合のプロセスが危機的状況においてより発展してきたという点である。例えば、EDC (European Defence Community) 構想の失敗はヨーロッパの政策決定者の危急的対処の必要性に対する共通認識をもたらし、ECC設立へとつながり、また、1960年代には欧州統合の性格について、政府間機構の形式と超国家的機関の形式との構想の違いによって英仏の政治的対立があったが、この議論を通して、より発展的な統合枠組み構築へとつながったとされる。近年ヨーロッパはBrexitや金融危機、難民といった数多くの危機を抱えているとされるが、こういった歴史的、政治的背景を理解することは、今後ヨーロッパの統合の在り方がどのように変化していくかの分析において重要であることが分かった。一方でグループペーパー作成においても、興味深かった点があった。トルコの歴史認識問題とEU加盟の是非について、フランス、ドイツ、オランダ、イギリスの対応の違いについて比較分析を各国出身の学生とともに取り組んだ際、私はイギリスを チームメイトはそれぞれの出身国を担当し、原文の一次資料を持ち寄り、議論し、一つのレポートにまとめた。ヨーロッパ各国から学生が集まる多言語の環境ならではの醍醐味であり、それぞれの肌感覚から導き出される視点の違いは、多様性を重視するヨーロッパの現実の姿を知るきっかけともなった。

period2では実際にEUの機関で政策立案にかかわる方の下でBriefing Noteといった政策提言ペーパーをグループで作成するといった機会があった。私はヨーロッパと中国が連携しアフリカのサブ・サハラ地域の貧困問題を解決するためにEU External Actionが取るべき政策についてスペイン出身のクラスメイトと共に議論を繰り返した。ヨーロッパの学生の中国への関心の高さを実感するとともに、ヨーロッパとアフリカという旧植民地支配の歴史の背景が今にもたらす影響等について「ヨーロッパ」の視点から学べたことはいい経験となった。

Period3は、私の留学前より抱えてきたEUと東アジアの地域主義の違いといった問題意識に最も近い分野であった。毎回異なる地域の地域主義を取り上げ、当該地域を専門とする教授がイギリスやベルギーから来校し "Europe in a Globalising World"の専門分野を選択した7名の学生のために講義及びディスカッションを行うといった贅沢な授業であった。EUを目指すべき地域主義のモデルとしたEurocentrismにとらわれるのではなく、各地域における地域主義の違いについて歴史的・政治的背景の比較分析からその特徴を明らかにするといった研究方法についての理解を深められたことは、今後の卒業論文執筆の際にも大いに役に立つと考えられる。また最後の授業で扱った東アジアの地域主義についての授業では、留学直前にインターンをしていた日中韓協力事務局についても取り上げられ、自身のアジアでの経験と遠くヨーロッパでの学びのつながりを実感することができた。今までとは全く新しいことだと思っていたことが実はつながっているということを知り、理論を学び、現実の問題について考える際に、一つの視点だけにとらわれず、さまざまな多角的な視野を養い結び付けていくことの重要性を改めて考えた。

さらに各periodの授業と共に特筆すべきこととして、学部が提供するBrusselsへのEU関連機関ツアーがある。このツアーは一泊二日でオランダEU代表部、European Parliament European Commission Committee of the Regions Centre for European Policy Studiesの見学を行い、EU行政の実務を実際に目で見て学ぶことができた。さらには、OB OGとの懇親会や、EUの人事担当者によるヨーロッパの学生向けの国際機関就職セミナー等、ヨー

ロッパの学生の就職活動事情についても知ることができた。特に、EUの機関への就職については、EU共通語と公用語を含む二か国語以上の実務レベルでの高い言語能力と、インターンや大学でのリーダーシップ経験を応募資格要件とするといったような高資質が求められており、クラスメイトの熱意に刺激を受けた。このBrusselsへのフィールドワークが留学中にクラスメイトと会う最後の機会であったが、勉強としても、2日間を通してより絆が深まったことも、留学の集大成としてこれ以上ない素晴らしいプログラムあった。

3. 大学授業以外の学習について

授業以外の時間には、当初の留学目的でもあった、ヨーロッパにある国際機関への訪問や講演会などの機会に積極的に参加した。

最も印象深かったのはICJの裁判の傍聴である。学部時代に国際法の模擬裁判を経験したことから以前より関心が高かった。実際に傍聴したケニアとソマリアの海洋の境界固定の事案では、日豪の捕鯨事件判決が引用されていたり、海洋法条約282条の解釈問題についての答弁がなされていたりと、今まで勉強してきたことが実際の裁判の現場においても問題となっていることに、学問と実務のつながりを実感した。また、当該事案は国境線をヨーロッパの植民地支配によって外部から設定されたといった歴史的背景をもつアフリカで、当事者間が自身の領域について主張し、国際法の下で解決するといった歴史的な一歩に立ち会えたことにも感激した。

また、そのほかICC ICTY ICTR（ハーグ）EU中央銀行（フランクフルト）、EU裁判所（ルクセンブルク）、バーゼル銀行監督委員会（バーゼル・スイス）等、国際機関に実際に訪問することで、その国際機関が位置する街の意義や、国際実務の現場感を味わうことができたことも興味深かった

さらに、マーストリヒト内でも、大学やNGO等が主催する講演会に足を運び、アメリカ大統領選前の結果予想についての議論や結果を受けての政策討議 EUの拡大戦略について、イスラム主義とテロリズムについてなど、ヨーロッパの今を知る絶好の機会だった。特にアメリカ大統領選の時は、ポピュリズムやBrexit、難民やExtreme Rightの台頭といったヨーロッパの抱える問題とも関連けられていたのが興味深かった。また、イスラム主義とテロリズムについての講演会では、イスラム教がテロリストと結びつけられることへの問題提起や、ISILに息子が参加して亡くなったという家族の話聞き、ニュースでは報道されない現場の姿についての理解を深めた。

4. 学業以外

半年間の留学生生活を過ごしたマーストリヒトは、ドイツ、ベルギーとの国境に接する街であり、度々近隣国に侵略された歴史を有することから、他のオランダの街とは異なる独自の文化を築いている。ベルギーからはフランス料理が輸入され、美食の街として知られる一方で、クリスマスにはドイツ由来のクリスマスマーケットが広場で開催され、仮設の遊園地やスケート場、オーナメントやグリューワインを販売する屋台などで賑いをみせるなど、多文化共生を当たり前とするヨーロッパの伝統に浸ることができた。

マーストリヒト内においては、EU設立のマーストリヒト条約の署名が残るネルカンヌ城や、マーストリヒト条約締結を記念した「1992年広場」EUの旗に描かれる星をモチーフにしたモニュメントなど、随所に「マーストリヒト条約」を身近に感じることができた。ヨ

ヨーロッパの歴史を大きく動かした出来事の舞台で、European Studiesを学べたことはとても意義深いものとなった。

さらには、マーストリヒトは周辺国へのアクセスも抜群で、自転車でベルギーとの国境をまたぐことができるなど、島国の日本で生活しては考えられないような国境の概念に衝撃を受けた。鉄道やバス、格安航空機を利用すればヨーロッパ全土に気軽にアクセス可能であり、寮の友人らとそれぞれが週末に旅行した国について話して盛り上がると同時に、ヨーロッパの一体性が交通インフラの部分からも支えられていることを実感した。

5. 終わりに

半年間という限られた期間ではあったものの、普段とは違う生活の中で様々な発見をし、充実した濃い毎日を過ごすことができた。マーストリヒトで学んだ多くの知見、留学中に会ったかけがえのない友人達、そして様々な文化の中で経験できたこと、そして何より、留学するにあたって支えてくださった先生方、家族、友人達 すべてに心から感謝の気持ちを表したい。